

経済・金融 フラッシュ

8月マネー統計 ～資金需要は浮上せず

経済調査部門 シニアエコノミスト 上野 剛志

TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

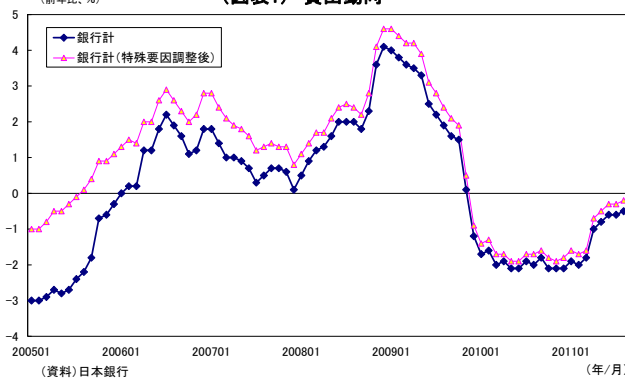
1. 貸出動向：銀行貸出残高は対前年▲0.5%

日銀が発表した8月の貸出・資金吸収動向等によると、銀行総貸出(平残)の前年比伸び率は▲0.5%と前月の同▲0.6%から若干マイナス幅が縮小したものの、21ヶ月連続の減少となった。企業の資金需要に力強さはみられず、震災以降のマイナス幅縮小の動きに停滞感が出てきている。

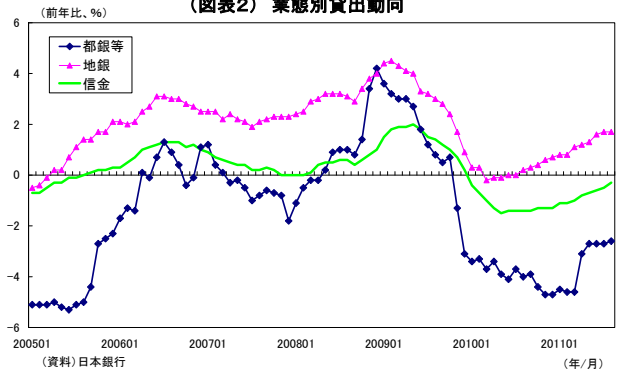
内訳では、都銀等が前年比▲2.6%減(前月は▲2.7%減)、地銀が同1.7%増(前月も同じ)と、都銀減地銀増の構造は変わらず。7月に統計開始以来初めて地銀の貸出残高が都銀等を逆転したが、8月も逆転状態が続いている。

大企業向けでは3月の震災以降、下げ止まり傾向が出てきているが、銀行貸出全体の4割強を占める中小企業向け貸出の減少が止まらない。中小企業向け貸出は2007年9月以降47ヵ月にわたって前年比マイナスが継続しており、この間の残高減少は13兆円に達している(図表1～4)。

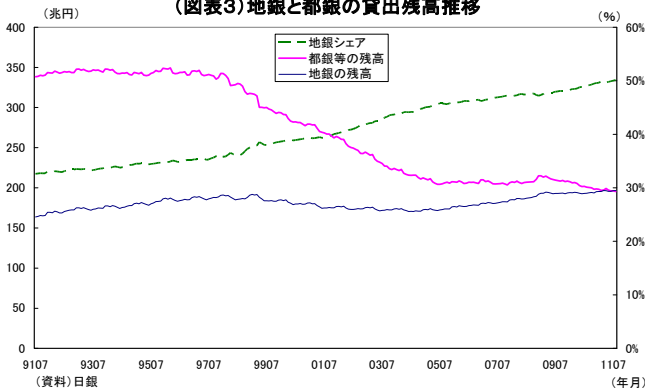
(前年比、%) (図表1) 貸出動向



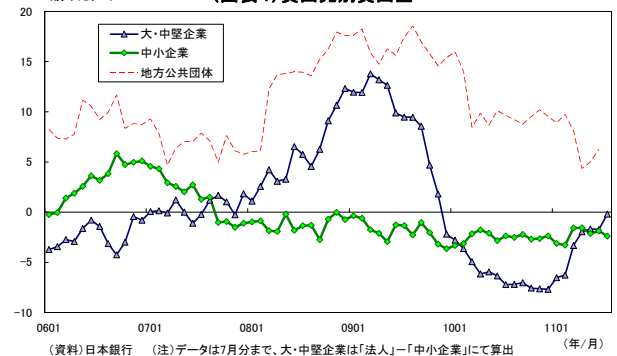
(前年比、%) (図表2) 業態別貸出動向

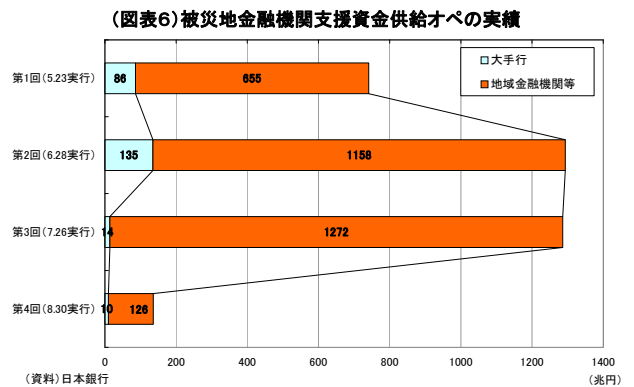
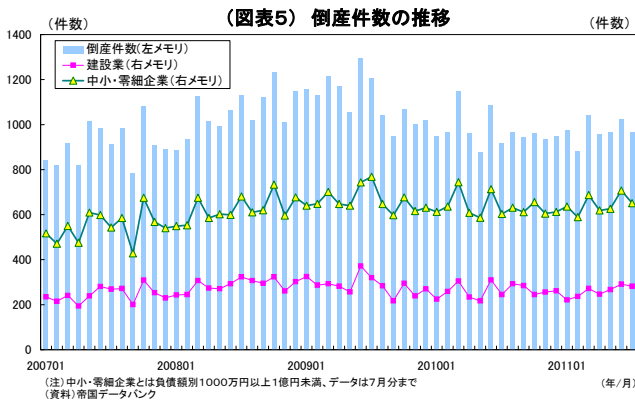


(兆円) (図表3) 地銀と都銀の貸出残高推移



(前年比、%) (図表4) 貸出先別貸出金





(日銀の被災地支援資金供給制度)

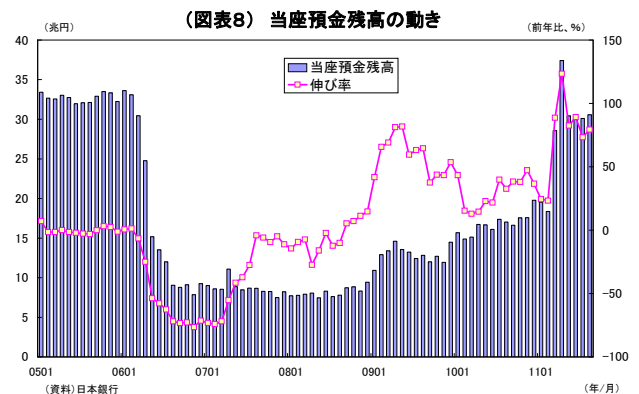
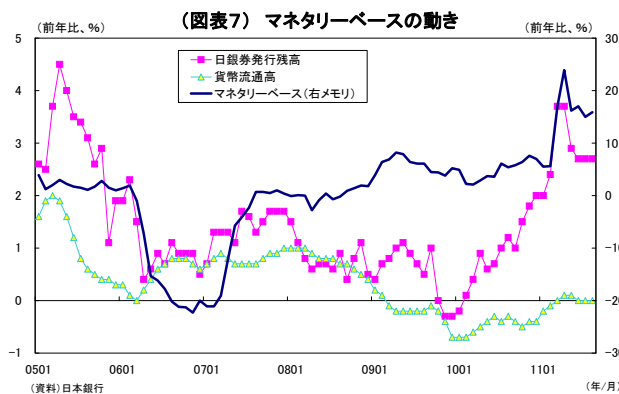
日銀による「被災地金融機関を支援するための資金供給オペレーション」の第4回目が8月末に実行された。当制度は被災地に営業所等を持つ金融機関などに対し、期間1年、利率1%の低利資金を供給するもので、4月末の決定会合で導入された。今回の実施額は136億円と7月に実施された前回の1286億円から大きく減少。累計でも3456億円と、10月までの資金枠1兆円に対する進捗率は3割強に留まっている(図表6)。復興の遅れで被災地の資金需要が未だ高まっていることが背景にあるようだ。

足元では海外経済減速、長期化する円高、電力不足問題などにより企業の設備投資マインド低下が懸念される状況にある。復興需要の早期顕在化で企業の資金ニーズを下支えできるかが今後の貸出動向のポイントになりそうだ。

2. マネタリーベース： 介入資金を市場に放置

日銀による資金供給量(日銀当座預金+市中のお金)を示す8月のマネタリーベース(平残)伸び率は前年比15.9%と前月(15.0%)を上回り、引き続き高い伸びを示した。残高も114.0兆円と震災以降歴史的な高水準が続いている。内訳では、日銀当座預金が対前年79.4%増と大きく寄与。日銀は震災後に金融市場安定のため資金供給を大幅に上積み。さらに8月4日に実施した円売り介入資金4.5兆円を緩和効果を高めるために放置したことも影響している(図表7,8)。

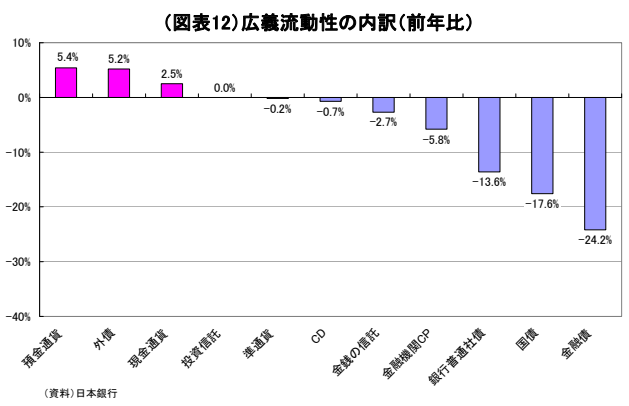
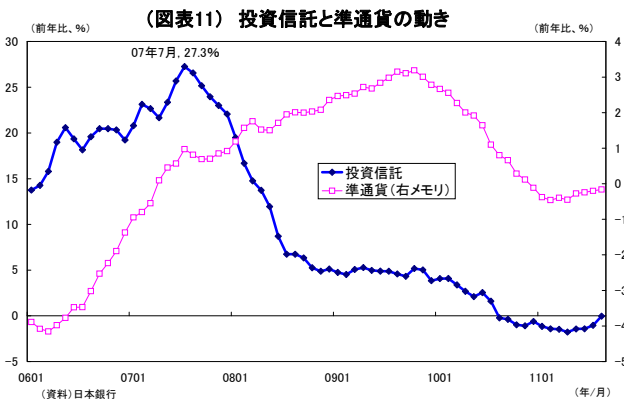
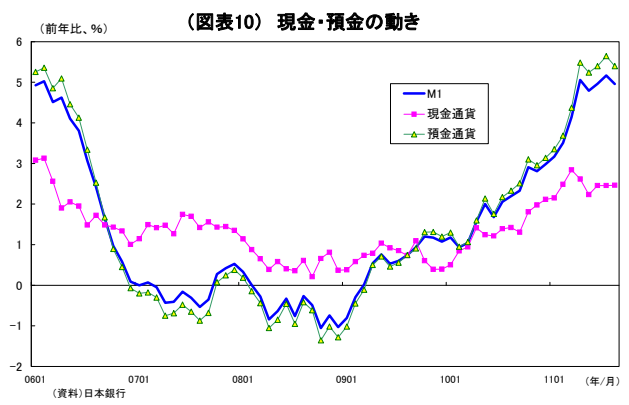
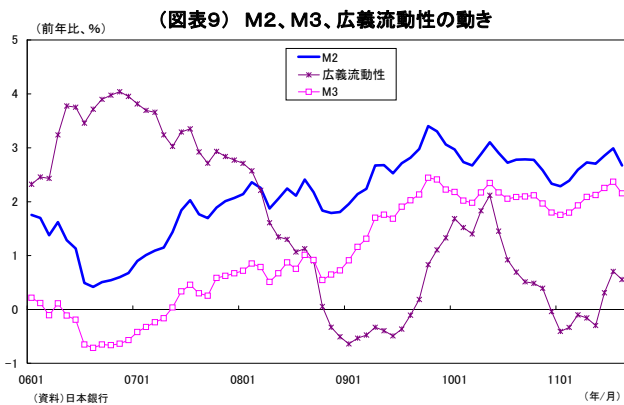
日銀は金融市場安定化のために潤沢な資金供給を行う姿勢を示しており、マネタリーベースは今後とも高い水準を維持する可能性が高い。



3. マネーストック：流動性重視に変化なし

通貨供給量の代表的指標である8月のM2（現金、国内銀行などの預金）平均残高は前年比2.7%増（前月改定値は3.0%増）、M3（M2にゆうちょ銀など全預金取扱金融機関の預貯金を含む）は同2.2%増（前月改定値は2.4%増）とともに前月からはやや伸びが低下したが、引き続き高い伸び率が続いている。M3に投信や外債などを含めた広義流動性も同0.6%増（前月改定値は同0.7%増）と3ヵ月連続で前年比プラスを維持している。

広義流動性の前年比内訳を見ると、預金通貨（当座・普通預金等）が前年比5.4%増、現金通貨が同2.5%増と流動性の高い資産が引き続き高止まりしている。特に預金通貨は震災後の4月に前年比5%台に乗せ、以降5ヶ月連続で5%台が継続。国内景気はこの間にかなり持ち直したが、資金面での流動性重視の傾向に変化はみられない（図表9～12）。



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。